

生の闘争と自立の精神  
～「大杉榮」という生き方を通して～

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター

今日、社会では様々な分野で多様、複雑化が進み、制度の上に制度を塗り替える作業が続けられている。その社会の動きに合わせるようにして「人間」そのものが、制度化の歯車を回し続けている。欲望と自我の肥大複雑化は止まる事をしらない。豊潤な物質と情報により、人は自己を見失い、他人の中に生きること心地よさを覚えている。自己自身の「生」を見失ったのである。

個人の「生」とは何であろうか。社会や制度が「個」を包囲している現在、「個人的な～」「個性的な～」という言葉も制度化された俗語にすぎない。人間関係を見渡しても、属性中心的な組織的仲良し倶楽部が横行し、「～会」の旗印のもとでしか「生」の意味を見つけれられない。

アナキズム（無政府主義）とは、『広辞苑』によれば、「一切の権力や強制を否定して、個人の自由を拘束することの絶対のない社会を実現しようとする主義」と定義されている。しかし、『広辞苑』の定義するアナキズムが政治の上で実現できるとは、誰も思っていないであろう。でもアナキズム思想に憧れるのはなぜか。それは誰もが皆自由を欲し、自分個人としての個性を輝かせようとするからである。

この論文で取り上げる大正時代は、そんな個人としての「生」が芽生え始めた時代であった。百家争鳴の大正に、アナキズムを「生」の行動学として、自己の「個」を生きた大杉榮の生き様に着目し、制度を攪乱することの意義を問いながら、現代における個の「生」を見つめ直したいと思う。

大杉が生きた大正という時代は、主義や組織に囚われない「生」と「生」の離合集散がデモクラシーを演出することになり数多くの思想が交差した。

この論文では、「大杉榮」という生き方を通して、まず第一章において、大正時代の気風を考察するとともに、大杉榮の思想と行動を分析する。第二章では大杉を中心としたアナーキーな人間関係と、その生き様を考察し、第三章では大杉榮という生き方を通して得られる生のあり方について考察した。最終的に生の闘争とは何か、自立の精神とはどのように養われるのか、その方法を探り、現実社会で個の「生」を取り戻す術を追求してきた。